

**作品タイトル**

『地図にない地図屋』

**元にした作品のタイトル**

特にありません。

**著者名**

川瀬えいみ

**あらすじ**

古い繁華街にある地図屋にやってきた、四十代半ばの成功した女性実業家。  
彼女は地図屋で過去に行く地図を使い、三十年前の反抗期に母にぶつけた一言を言わない人生を望む。  
地図を買った翌日（彼女にとっては三十年後）、地図の代金を払いにきた彼女は貧困家庭の主婦に変わってしまっていたが……。

**特記事項**

30年のタイムリープを、10分くらいで表現するのを目指してみました。

**本編文字数**

4973 字

私の商売は地図屋。店は、残念ながら、地図には載っていないけれど。

私の店で売っている地図は、国土地理院発行のものでもなければ、民間発行の観光マップでもない。古地図でもなく、宝の地図でもない。

私が扱っているのは、時の地図。心の色が変わるほどたくさんの後悔や希望を持っている人にしか見えない切ない地図だ。

店に迷い込んできた人間にだけ、私は私の地図を売る。オンライン販売はしていない。客は、平均して三日に一人。

お代は後払いだ。地図の使用後、客が相応と考えた額を支払うルールになっている。客が私の地図を無価値と判断したら、お代は不要。

だが、お代を踏み倒した客はこれまで一人もいない。私が扱っているのは価値ある地図だ。

今日の客は、四十代半ばの、いかにも裕福そうな女性だ。

すらりとした肢体にまとっているのは、仕立てのいい灰色のパンツスーツ。履物は、この街でも日中は少数派になったハイヒール。化粧はナチュラル寄りだが、口紅はしっかり塗っている。髪は、乱れ毛一本もない漆黒のボブ。

姿勢がいい。良すぎるくらいだ。常に肩と気を張って生きているのかもしれない。容貌は端正とは言い難いが、そんなことに引け目を感じる必要もないほどの何かを持っているのだろう。彼女の表情と所作には、確然とした自信がみなぎっている。

瞳には知性の輝き。しかし、その奥にはぼんやりした闇があるようだ。

彼女の存在感と輝きは天賦のものではなく、彼女の強い意思によって築きあげられたもの——ということか。

「ここは何を売っているお店なの？」

彼女は探るように尋ねてきた。

一平米の値段が四千万もする街で、僅か五平米とはいえ、年齢不詳性別不詳の人間が一人ぼつねんと小さな卓に着いているだけの、売り物が何一つ見当たらない店。私の店は、彼女だけでなく、誰にとっても、“ありえない店”だ。怪しまないのは、地価という言葉を知らない幼い子どもくらいのものであるだろう。

「地図ですよ」

「どんな地図を？」

「過去に行く地図と未来を知る地図があります。どちらをお求めですか？」

ここで私を奇人と決めつけて私の問いかけから逃げようとするような人間は、そもそも私の店を見付けられない。

彼女は、一度大きく瞳を見開き、その後、私の前で無言で考える素振りを見せた。

答えを出すまで一分弱。

彼女の答えは、

「過去に行く地図」

だった。

「珍しい」

ほとんど反射的に、だがゆっくりとした口調で、私が低く呟く。

彼女は、それを聞き逃さなかった。

「そうなの？」

彼女は、のんびり屋の私の対極にいる人間らしい。自身の反問に対する私の返答を待たずに、彼女は彼女の推察と見解を披露しだした。少々早口で。

「過去に行く地図と未来を知る地図のどちらかを手に入れられるとなったら、大抵の人間は過去に行く地図をほしがると思うけど。それは過去をやり直せるということでしょうか？ 過去の失敗をなかったことにできるということ。となれば、大多数の人間は――」

彼女は、自分以外の人間は自分と異なる価値観と望みを持っているということを知っている人間のようなのだ。つまり、観察眼、推察力、想像力を備えている。とはいえ、だから彼女が思い遣りのある心優しい人間であるとは限らないが。

「ご賢察の通りですが、お客様は、既に大きな成功を収めた方のようなので」

過去に行く地図を求めるのは、今が幸せでない人間であることが多い。彼等は、状況が今より悪くなることはないだろうと考えて、安易に過去をやり直そうとする。

逆に、今が幸せな人は、未来を知る地図を求めることが多い。へたに過去を変えて、“やり直した今”が“今”より悪くなることを案じるからだ。今より良くなると確信できないから、より大きな成功ではなく、未来の危険回避を考え

る。

「特に、人生の後半に入り、それなりに安定した暮らしができている人は、過去を変えて、より幸福になることより、残りの人生を無難に過ごす算段をすることが多いんです。そのために、自分の死期と死因を知りたがる」

私が言っているのは、もちろん一般論だ。おおよその傾向にすぎない。人間の価値観や幸福感は人によって異なる——人の数だけある。

「つまり、あなたの目に映る私は、既に人生のピークを過ぎて、守りの態勢に入っているもおかしくない中年女——ということね」

その通り。私は彼女に『今より上に上がる日は来ない』と言ったも同然。

温和な性格ではなさそうなので、彼女が気を悪くすることを案じたのだが、彼女の反応は苛烈なものではなかった。

「私、成功者なのかしら……」

彼女は、独り言のようにそう呟いた。改めて、ゆっくりと私の方に視線を巡らせてくる。

「私、ある企業の創業者社長なの。知ってるかしら」

彼女が口にした企業名は、私でも知っているものだった。

男性限定の人材派遣会社だ。様々な業種の様々な職種——企画、営業はもちろん、IT、教育、デザイン、接待、その他諸々、幅広く取り扱っている。ハイクラス人材を謳っており、登録資格のハードルの高さが売りのため、登録者数は五十万人と少なめ。社員数は五百人、年商三百億の大企業だ。

業務拡大のアイデアを求めて気分転換がてら街をぶらぶらしていたら、いつのまにか、この店にいたという。

年齢四十四歳で、大きな企業のオーナー社長。間違いなく、彼女は成功者だ。

成功者は、自身の家族に関することは何も言わなかった。

「本当に過去に行けるのなら、そして、三十年前のあの日をやり直せるのなら、私は、我が社の去年の純利益二十億を全部、あなたにあげてもいいわ」

「期待しています」

本気で期待していないことがあからさまな彼女の声と私の声。私は、この店で唯一の売り物を方形の卓の上に取り出した。

少し厚みがある星座盤に見えるそれは、幅と奥行きと時間の三方向に自由度を持つ地図だ。高さの代わりに時間の座標を持つ三次元の立体地図。

「三十年前のいつがよろしいでしょう？」

地図に積み重なっている三十年分の面をスライドし、彼女が十四歳だった年の地図を示しながら、私は彼女に詳細な指示を求めた。彼女の目と心は時の地図に釘付けになっている。

「七月……中学二年の一学期の期末テストの最終日だったわ。その翌日が夏休みの勉強合宿の申込み締切日で——」

更に五ヶ月分と少し、地図の面をスライドさせていくと、突然、彼女の地図に、まるでブラックホールのような黒いシミが浮かんできた。

「この日ですね」

私の声が聞こえているのかいないのか。彼女はじっと地図を見詰めていた。まるで希望と絶望の両方に魅入られでもしたかのように。

「では、良い旅を」

囁く声で、私は彼女の背中を押した。

翌日の午後、彼女は再び私の店にやってきた。

長い長い三十年の旅を終えた彼女の様子は、昨日の彼女とは全く違っていた。

薄茶色の着古した上着とスカート。布製のローファー。無造作に首の後ろで一つにまとめられている髪は、水気も脂気もなく、ぱさついている。その半ば以上が白い。化粧気もない。

「地図のお代を払いに来ました」

と告げる声も掠れていた。顔に浮かぶ微笑も薄く弱々しい。しかし、その瞳や表情は、不思議に明るく温かかった。

「三十年前に一度、私は、私の家を壊したんです」

彼女が自身の旅を語りだす。その声音は、疲れと喜びが絶妙な割合で入り混じった、いわく言い難いものだった。

「反抗期の只中にいた私が母に投げつけた一言が、母を傷付け、私自身を傷付け、家族という関係を壊してしまった」

彼女の家は、両親と彼女の三人家族。父親は高学歴のエリートで、プライドの高さゆえに周囲の人間とうまくやっていくことができないタイプの人間だったらしい。名の通った企業に勤めていたが閑職に追いやられ、やり甲斐を見失い、傷付いたプライドを酒と家族への暴力で晴らすようになった。酒代を稼ぐために仕事は続けていたが、家に生活費を入れることはなくなった。母親がパートを掛け持ちして、家計を支えていたが、その生活は苦しかった。

中学二年生の一学期の期末テストの最終日。その翌日は夏休みの勉強合宿の申込み締切日だった。

参加費一万円。クラスで参加しないのは、家族旅行の予定のある子ばかりだった。

彼女の母は、苦しい家計の中から合宿の参加費一万円を工面してくれていた。しかし、それを父が見付け、飲みについてしまったのだ。

たった一万円。たった一万円を横から奪われただけで、皆が参加する合宿に自分だけ参加できなくなる。そんな惨めな自分、惨めな暮らしが、彼女は嫌で嫌で仕方がなかった。

「もうやだ、こんな家！ お母さんは、いつも、『ごめんね、我慢して』ばかり！」

父を責めれば暴力を振るわれる。彼女は母に当たるしかなかった。

「全部、お母さんが無能なせい！ お母さんが無能な愚図で、ちゃんとしたお勤めができないから、お母さんはお父さんと離婚もできないんだよね!? 私、お母さんみたいな人から生まれたくなかった！ 私は、お母さんみたいな人になりたくない！」

悪気はなかった。何か言わずにはいられなかったただけだった。悪いのは父だとわかっていた。にもかかわらず、その時は、簡単に父に見付けられてしまうようなところに金を置いた母が悪いという理屈になっていたのだ。

ひとしきり母をなじってから、彼女は、母が石のように動かなくなっていることに気付いて喚くのをやめた。

「お……お母さん……？」

「あんたなんかを産むために、命をかけた私が馬鹿だった」

母に、ふいに抑揚のない声で言われて、彼女は心臓の中心から震え上がった。

言葉の意味を理解するのに数分。言葉の意味だけを理解し、不気味な衝撃を受けた。

彼女は、その時にはまだ、自分が母を傷付けたことも、母の言葉によって自分が傷付いたことにも気付いていなかった。自分が母の愛を失ったことに彼女が気付いたのは、それからさらに数日後のことだった。

家庭を顧みない父の分も働いて、懸命に子どもを育てている母。彼女はそんな母の生き方を否定したのだ。

その時以降、彼女の母は彼女を見なくなった。彼女の母は、彼女に対して完全に無反応。嫌悪の色さえ浮かべなくなってしまった。彼女は泣いて母に謝ったのだが、娘に対する母の感情は蘇らなかった。その日、彼女は、越えてはならない一線を越えてしまったのだった。

母に許してもらえる時は永遠にやっこないと悟った彼女は、それ以降、貧困から抜け出すためだけに無我夢中で働いた。恋や結婚に気持ちを向けることはなかった。家庭の幸福の儂さを知ってしまったから。

『私、お母さんみたいな人から生まれたくなかった！ 私は、お母さんみたいな人になりたくない！』

「あの地図で過去に行った私は、あの言葉を言わなかったんです。代わりに、『お母さんは悪くない。いつもありがとう』と言った。母は、『恵美はどうしてそんなに優しいの』と言って、私を抱きしめてくれました」

そうして彼女は母と決別せずに済んだ。二人は母と娘であり続けることができたのだ。

「父と正反対の人と結婚しました。一人息子には先天性の心疾患があつて、最近母の介護も始まって、すごく大変なんです」

それは今の彼女の佇まいを見ただけでわかる。今日の彼女が身に着けているものを全てひっくり返しても、昨日の彼女のハイヒール代にも及ばないだろう。

「大変は大変なんですけど……。認知症が始まった母の口癖は『いつも優しくしてくれて、ありがとう』で、息子は、一日に一度は『ママ、大好き』と言ってくれるんです」

無言で聞いている私の前で、朱色に染まった目元に幸福そうな皺を刻み、彼

女は少し気恥ずかしそうに笑った。

「以前このお店に来た時は、二十億払うなんて大口を叩いてしまいましたけど、家計が苦しくて、今の私にはこれが精一杯なんです」

彼女が差し出したのは、何度も皺を伸ばした跡のある一万円札が一枚きり。

「お母様が苦勞して用意された夏休みの合宿参加費と同じ額ですね」

私は、それを、透明なシャボン玉を包むようにそっと両手で受け取った。

手入れどころではないのだろう肌はかさかさに乾いているのに、彼女の眼差しは豊かに潤んでいる。

「幸せの意味を、あなたの地図のおかげで知ることができました」

『ありがとう』を繰り返し、彼女は店を出ていった。

少し猫背になった彼女の肩の丸みが、私の心を暖めてくれる。

これだから地図屋はやめられない。